

仙台「海防」先覚者の系譜

わたなべ 拓

我が国は、国土の周囲を海洋に圍繞された海洋国家であるが、海洋国家・日本の国防をいかに確立すべきかという「海防」を考える上で、仙台の先人が果たしてきた先駆的役割とその系譜の再評価を試みたい。



我が国領海等 出典 海上保安庁HP

尖閣諸島、竹島、小笠原諸島、北方領土と、隣国との領土・領海紛争が報道されない日はないかのごとく、近年の我が国周辺安全保障環境は緊張の度を高めつつある。18世紀の我が国も、今日と同様の危機を迎えつつあった。徳川幕府による「鎖国」政策が、相次ぐ外国船の来航により動揺を来し始めたのである。

早くも、元文4（1739）年にはロシアのspanベルグ隊長率いる4隻からなる日本探検隊が、陸奥国牡鹿郡網地島（宮城県牡鹿郡牡鹿町）の南端長渡沖、同国亶理郡磯浜（亶理郡山元町坂元）、牡鹿郡田代島（石巻市）三石沖などの仙台湾に出現している。世上に有名な米太平洋艦隊・Mペリー提督の浦賀来航（嘉永6・1853年）より120年ほど以前に、他にもない我が仙台湾に4隻の外国船が出没していた事実¹は興味深い。

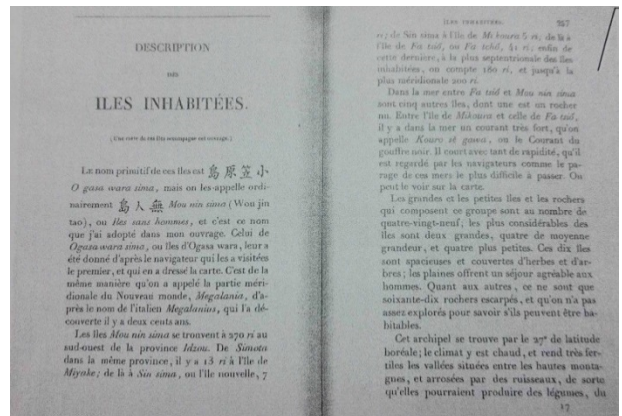
また、明和8（1771）年には、ロシアからの独立戦争で捕虜となったハンガリー出身のポーランド人ベニョフスキー（ハンペンゴロ）が反乱を起こし脱獄し、カムチャッカ半島から南下して四国などに寄港。オランダ商館長宛にロシアが日本に野心を抱いている旨を報知したことで、幕府首脳や在野の知識人に北方の危機を一定程度認識させることになった。

ここで、「海防」とは、海洋国家・日本という地勢の特

質を明確にしたうえで、いかに国防を全うするかという問題意識であり、いわゆる学問としての国際関係学の先駆でもある。海防に尽瘁した先覚者の系譜を眺めると、そこには仙台藩関係者による個々の重大な貢献と、その問題意識の継承の軌跡が見出される。18世紀後半の北方の危機に我が国で最も早く反応したのが、仙台藩関係者である林子平と工藤平助であった。二人は共に仙台藩関係者にして同時代人であり、工藤は子平の支援者でもあった。

工藤平助（球卿、享保19・1734～寛政12・1800）は仙台藩医で、時の老中田沼意次と密接な繋がりを有する周旋家でもあった。地理書『ゼオガラーヒ』（独人ヨハン・ヒュブネル）をもとに『赤蝦夷風説考』を著し、「赤蝦夷」（ロシア）の真意は侵略にあるのではなく、交易にあるとして、日露の交易により蝦夷地も開発していくべきとした。

翻って、林子平（元文3・1738～寛政5・1793）は明治維新に先駆けること約80年、「西力東漸」の危機を敏感に察知し国防体制の確立を高唱した海防分野第一の偉人である。著書『三国通覧図説』（1785年）では、当時の地理認識における隣国である朝鮮、琉球、蝦夷の「三国」との地理的、政治的関係を明らかにして、これら隣国との有事に備えようとした。ここで、子平は工藤の楽観的な見立てとは異なり、長崎におけるオランダ商館長フェイト²との対話をはじめとする種々の情報からロシアの野心を見抜き、ロシアによる「蝦夷人」（アイヌ）懐柔による間接侵略を警戒すべきと説いた。ちなみに、『三国通覧図説』の仏訳本³の存在により、小笠原諸島が我が国領土として世界に周知され、このために辛くも江戸後期から明治初期にかけての領土危機を凌ぎ領土保全を達成した功績⁴はあらためて多とすべきである。



『三国通覧図説』林子平、klaproth 訳、「小笠原島」部分

明治維新の志士達の必読書となった林子平の主著『海国兵談』における「江戸の日本橋より唐、阿蘭陀迄境なしの水路」との言葉はあまりに著名である。



林子平 仙台市博物館蔵

「海が天然の要害として外敵の侵攻を防いでくれる」というのが太平の世の通念であったところ、子平ただ独り、四方を海で囲まれているからこそ、どこからでも敵の思うままに侵攻可能であることを喝破したのであった。「コロンブスの卵」にも比すべき視点・発想の転換と評価すべきである。子平も「千古独見」（日本国始まって以来、自分だけが見通せた）と自負した独創的構想、すなはち、ハリネズミのように日本国の総海岸を50年かけて要塞化するのみならず、主導的に防衛するため「水戦」（水上戦闘）を可能とする海軍を建設する。しかも、軍艦建造、大砲製造の技術養成だけでなく、「船将」（海軍士官）の養成までを視野に入れた独自の総合的国防策であった。

革新的な海防の聖典を世に問うも、出版資金が大幅に不足したため赤貧のなかで事実上自家出版によるほかはなかった。それは、庭の雑草を煮立てた雑炊をすすりながら、印刷用の版木まで子平自ら彫らざるを得ないという数年に渡る苦闘なのであった。子平奮闘の現場は、仙台一高の南側の住宅地（若林区表柴田町）に所在し、ここが子平終焉の地となる。現在は、子平を顕彰する標柱も朽ち果て、当時を偲ぶ縁は隣家の樹齢300年の松のみである。ここ数十年にわたる仙台市政の歴史に対する姿勢を垣間見る思いである。

寛政4（1792）年5月、とりとめのない虚説を流布させたとして、時の老中松平定信によって、子平は仙台の居宅において蟄居を命じられる。粒々辛苦の末に完成した『海国兵談』の版木も全て没収・破却された。しかし、同所で蟄居謹慎中に、子平の一身を賭した警醒の予言は的中する。仙台で蟄居して4ヶ月後の同年9月、蝦夷地の根室にロシアのラクスマンが来航する。前後し

て、子平を投獄した松平定信は江戸湾沿岸を「海防御用掛」として二度にわたり巡検する破目になる。子平がかつて『海国兵談』において「長崎のみ大砲で嚴重に護れば事足りるとして、江戸湾が無防備なのは片手落ちである」と指摘したことへの対応とも評価できる。子平を「とりとめもない虚説」で世を惑わしたとして罰した老中・定信自らが、子平の献策を実行するという皮肉を、幽囚の子平はいかに眺めつつ「罪人」の身で没していったのか。圧倒的な自己犠牲のもと、子平の視線は既に「藩」を乗り越え「近代国家・日本」を見据えていた。

子平没後約100年、その志は横尾東作（天保9・1838～明治36・1903）に引き継がれた。横尾は下新田（現加美町）に生まれ、16歳で仙台に学び、23歳で江戸にて林家の学塾で経学を、ジェームズ・ヘボンなどから英学を学び、戊辰の役に際しては、仙台藩の公儀使（外交官）の一員として他藩・列国との折衝を担当。最後は函館（当時は箱館）に渡り新政府軍と一戦交えた文武両道の烈々たる武士である。下獄してからは、当時の新学問である英学の素養があったため、早稲田大学の前身たる北門社や、藩校辛未館において英学教授を短期間務めた後、神奈川県や警視庁において約20年の中級官吏生活を送った。



横尾東作 出典『横尾東作翁伝』
河東田経清、大正6年

横尾の真骨頂は「東洋のコロンブス」の異名にこそ在る。大東亜戦争（太平洋戦争）において、米軍に最大の損害率を与えた「硫黄島の戦い」で著名な硫黄島を含む「火山三島」が日本領と確定したのはそう古いことではない。明治24（1891）年、正式に日本領となるが、その契機をつくったのが他ならぬ横尾である。前述の林子平『三国通覧図説』により辛くも保全出来た小笠原諸島（明治9・1876）ではあったが、付近に所在する硫黄島を含む火山三島の帰属は英国による強引な主張もありなお不明とされた。当時は近代国家として船出し

て日なお浅く、幕末からたださえ遠慮がちであった外交も尚更に弱腰であった。このまま政府の無策が続けばいずれ列国（英、米は野心を明らかにしていた）により同地が占有されるに至るとみた横尾は、明治20（1987）年、決然と官を辞して私財をなげうち民間探検隊を編成し、その一部を硫黄島に上陸させた。横尾の挙により政府もようやく重い腰を上げ、4年後に同地は日本領となる。一私人が国土を保全・拡張した嚆矢である。



硫黄島 出典 気象庁

ちなみに、探検隊を同地まで運んだ船は通信省所有「明治丸」であるが、横尾に便宜を図ったのは時の通信大臣榎本武揚である。かつての五稜郭の戦い（明治2・1869）の首領であり戦友である。さらには、最終的に日本領土たることを宣言した所管の内務大臣は品川弥二郎である。品川は先師吉田松陰が江戸の獄に送られる際に籤を引かされ、「林子平」のクジを引き当てた。「品川よ、林子平たれ」とする松陰の遺言であったと品川は追懐⁵している。品川は松陰の遺言を守り、内務大臣として、林子平を「一代ノ偉人」であるとして全国の小学校に林子平の肖像を設置する運動を牽引した⁶という。このように、林子平の問題意識を正当に継承した横尾、品川らなかりせば、同地は第二の香港ないしハワイとなり、我が国の



岩崎卓爾 出典『岩崎卓爾一卷全集』

発展は想像も出来ない程に英米により掣肘を受けたことは確実であった⁷。

岩崎卓爾（明治2・1869～昭和12・1937）は、横尾の息子世代である。気象学の実務家として沖縄県石垣島に40年間在島し、同地の生物学、民俗学の始祖としても著名である。岩崎は、仙台一高の前身たる宮城県尋常中学校（明治25年開校以前の旧宮城県尋常中学校）を経て、第二高等中学校（現東北大学）を卒業直前に中退する。北海道に渡り気象庁技術者として奉職すること約10年。岩崎は気象人として最大の「敵」である台風と闘うべく気象の「防人」として、台風の最前線たる石垣島に志願して赴任した。「天文屋の御主人」「片目の岩窟王」（大正3年、台風観測中に飛来した岩石で右目を失明。文字通り「防人」の仕事ぶりであった）「和製ガンジー」など多くの愛称をもつことから、その強烈な個性と愛すべき人柄が偲ばれる。気象を通じて、同地に科学的精神を普及させることに努めた。石垣測候所はさながら文化の殿堂の観があった。同地の新種生物の発見は実に30数種。「イワサキゼミ」「イワサキホタル」「イワサキクモ」など枚挙に暇がない。当時は全く顧みられなかった同地の風俗、習慣、歌謡を詳細に記録し、『石垣島気候篇』『石垣島案内記』『八重山童謡集』などを著した。民俗学の大家・柳田國男の研究にも裨益したこれらの著書は、林子平『海国兵談』と同じく、自家出版であった。

昭和3（1928）年、捨てて顧みられなかった「辺境」八重山諸島の民謡が、2000km彼方の開局まもない首都東京のJOAK（日本放送協会）から当地に届いたとき、初めて島民は「これでやっと日本全体に認められた」と思ったという。かかる成果を期待してこそ、一途に地方民謡の全国放送企画を推進したのが岩崎であった。この間、二人の娘を立て続けに亡くしたものの、関係者を動揺させ事業に支障を来さないため事業実施を見届けるまでは厳秘とした。岩崎は、辺境に近代化をもたらすと同時に、辺境の固有の価値を再評価することにも努めた。それは、「海防」の一表現たる文化防衛という側面にも留意した営みであった。昭和20年7月10日の仙台空襲まで仙台の旧宅にあり、岩崎が愛読したという林子平の『海国兵談』『三国通覧図説』⁸の問題意識を昇華したうえでの実践であったといえる。

所期の念願通りに石垣島の土と化した岩崎の戒名は「袋風院卓舟蝶仙居士」。終生取り組んだ「台風」と「蝶」に並んで常に岩崎の念頭から去らなかつたのは郷里「仙台」であった。岩崎夫人は、せめて遺骨だけはと、遙々と石垣島から奇しくも林子平終焉の地から指呼の間の荒町・泰心院の墓所に移した。石垣島最古の胸像⁹は、異郷人である仙台人・岩崎のものである。没後64年目の平成13（2001）年、岩崎卓爾は石垣市名誉市民となる。



石垣島地方気象台の岩崎胸像前にて筆者、平成28年8月



岩崎を石垣市名誉市民に推挙した石垣繁氏(八重山文化研究会会長・画像中央)と。平成28年8月

仙台藩政時代から近代に至る郷土「海防」先覚者の系譜を概観すると、そこからは「予言者」「先駆者」「防人」として我が国の安泰のため一身を賭してこられた先人の烈々たる系譜が浮かび上がってくる。いかに我が仙台は、林子平に源を発する「識る人ぞ識る」全国区の偉人を輩出してきたことか。緊張の度を高めつつある東アジア情勢と我が国の危機を前にして、林子平—横尾東作—岩崎卓爾—と連なる仙台海防の系譜を追体験することは意義あることと信じるのである。

注

- ¹ 「元文の黒船」として記憶される。
- ² Arend Willem Feith (1745～1782) 長崎在任期間は、1775年10月～1776年11月。
- ³ 『Memoires relative a l' Asie』 1826, (Klaproth, Heinrich Julius)
- ⁴ 文政10(1827)年には英国測量船ブロッサム号が小笠原諸島を測量の上に上陸し領有宣言。次いで、ロシア船が寄港し船長ルトケが同地のロシア領有を宣言。嘉永6(1853)年には、米太平洋艦隊ペリー提督、ロシア太平洋艦隊プチャーチン提督が父島寄港。文久3(1863)年から暫時、日本人が無人の地となる。明治9(1876)年10月、小笠原諸島の日本国領土たることを諸外国に宣言。
- ⁵ 『仙台藩の歴史—4 林子平その人と思想』平重道、宝文堂、昭和52年、276頁
- ⁶ 同上、278頁。
- ⁷ 脚注4で既述のように、英、米、露は、同諸島に対する野心を隠さなかった。特に、M・ペリー提督は、1853年5月、「遅かれ早かれカリフォルニアと中国との間に設けられるに違いない蒸気船航路のための停泊地としてピール島を推挙することを考慮して」父島に寄港している。『ペリー日本遠征日記』Matthew Calbraith Perry (金井圓訳)、新異国叢書第II輯、昭和60年、雄松堂出版、147～148頁。小笠原諸島植民地化の危機は現実のものであった。
- ⁸ 「父・岩崎卓爾」、菊池南海子、『岩崎卓爾一卷全集』、伝統と現代社、昭和49年、433頁。「孤島の父・岩崎卓爾」菊池南海子、『ドキュメント日本人7 無告の民』、学芸書林、昭和44年、219, 220頁。
- ⁹ 岩崎退官直後の昭和7年に有志で建立したもの。現在も石垣島地方気象台正面に設置されている。昭和20年の沖縄戦に際して米艦載機の銃撃にあい、一部弾痕がみられる。